



言語文化部と辞典収集

言語文化部教授 中野美代子

4年前に言語文化部が創設され、私もまた文学部からの移籍がきまったとき、学内外のな
ん人かの研究者から、こんな祝福の言葉を受けた。「言語文化部か——そいつはすばらしいな。
世界中の言語の辞典を集めてくれよ。おれたちも大いに利用させてもらうから」

この言葉を肝に銘じて4年、新設の部局は理想を追うよりも、目の現実に対応するの
に忙しく、世界中の言語の辞典を集めるなどという迂遠な収書計画について議論することすらな
かった。

そもそも、世界中の言語といってもその数すら不明である。ごく新しい資料によれば、最
少限4,200個、最大限5,600個とその数を見積り、さらに、うち約2,000個の言語が未研究のま
まであるという。してみると、約2,000個の言語については、研究もゆきとどき辞典も存在す
るということになろうか。2,000個の言語すべてについての辞典の収集は、あらゆる意味にお
いて無理であること明白であるが、せめてその4分の1の500個の言語の辞典は集めたい、せ
めてその程度は実現可能な目標としたいと、私は思いはじめていた。

言語文化部には、周知のように、英・独・仏・露・アジア・古典語・比較言語文化・日本の
各系がある。これを各系所属の教官の専攻言語でいえば、英・独・仏・露・中・希・羅・日の
8個の言語となる。各系それぞれにおいて、専門とする言語の辞典は各種そろえているから問
題はないとして、それ以外の言語の辞典の収蔵があまりにも貧困なのは、言語文化部として、
いや当該部をも擁する本学として、恥ずべきことではあるまいか。

もちろん、文学部には上記以外の言語を研究する、ないし研究手段とする教官が若干名
おられるし、また言語文化部共通図書資料としてここ1~2年内に収書した辞典も若干部はあ
る。さらに、教養部人文辞書資料室に収蔵されている辞典類のなかには、上記8種の言語以外
の言語辞典も約100点含まれていて、うち数点は極めて稀覯の貴重なものとして自慢できるの
である。

とはいえ、言語文化部としては、より豊富な辞典コレクションを目ざすべきであろうこと、
申すまでもない。言語文化部の構成メンバーがヨーロッパ諸語の専門家に大きく偏り、アジア
言語系に中国語の専門家が2名しかいないという現状については、教養部における語学教育と
いう観点に立って全学的に別途に再検討されるべきであろうが、ヨーロッパ諸語の専門家が圧
倒的に多い現状に則しても、英・独・仏・露・希・羅の諸語以外のヨーロッパの言語の辞典が

あまりにも貧困であるという事実は、目を蔽わしめるものがある。

まして、ハム・セム語族のエジプト語・ヘブライ語・アラム語・アラビア語などに至っては皆無に近く、さらにいわんや、アフリカ諸語・南北アメリカ諸語（エスキモー語・マヤ語など）・大洋州諸語（マオリ語・フィジー語）などにおいてをや。

ここで、まだ夢のような段階にある私の計画に対して、批判ないし異議が出るかもしれない（実際に出たのだが）。つまり、「だれひとり研究もしていない言語やマイナーな言語の辞典を集めてどうするのだ。利用者もないままに死蔵するだけじゃないか」と。

しかし、私はそうは思わない。収蔵していればこそ、それを利用して新たな分野をきり拓く若い野心的な研究者も出てくるかもしれないことを、私はまず夢見る。たとえば、キリストがしゃべったというアラム語に接して、キリスト教をめぐる奥ふかい言語文化への探求のきっかけとする、というように。そうでなくとも、大学の図書館ないし図書室は、高度の公共性を帯びた知識の殿堂でなければならない。言語文化部の図書資料室のあるべき姿は、現在の諸教官の専門領域は言うに及ばず、それ以外にひろがる広大な領域にも目を向けて、世界中の言語のうちのせめて500個から1,000個の言語については、最少1種の辞典は収蔵する、というものでなければならないであろう。

最近の語学教育においては、視聴覚教育関係の機器の導入が流行のようである。その有効性を私も否定はしない。しかし、言語文化の研究・教育の原点は文献であり、とくに辞典であることを忘れてはなるまい。

欧米諸国は、かつて植民地支配政策時代に、その必要に迫られて、いかにマイナーな言語であろうとも、それらの言語の辞典づくりに熱中した。その遺産が、近年とみに復刻され、また、それらの基礎の上に立つ辞典新刊もさかんである。一方、経済的にはまだ後進国といえる現代中国においても、世界のマイナーな言語を含めて辞典の編纂・刊行がさかんで、とくに、アジア・アラブ・アフリカ地域の諸語については、かなりの種類の辞典が刊行されている。（因みに言う、辞典の編纂・刊行という点においては、わが国はおそろべき後進国なのだ。）

さて、以上のような世界の辞典出版事情からして、いまのうちなら、かなりの種類の辞典の収集が期待できるであろう。にもかかわらず、そのための予算が寥々たるものでしかないこと、私は悲しい。全学の関係諸官のご理解とご協力とによって、言語文化部として、いや本学全体として誇るに足る辞典コレクションを収蔵したいと、心から切望する次第である。

Library

Library

ヨーロッパの図書館における「手稿」類の保存と利用

経済学部助教授 吉 田 文 和

ヨーロッパの図書館は古くからの伝統と蔵書の豊富さをほこっているものが多い。その所蔵物のなかには、書籍のみならず、さまざまな資料、史料、「手稿」類も含まれている。

British Library や Bibliothèque Nationale などの有名な図書館の概要については、すでに紹介も多くなされていることでもあり、ここでは、「手稿」類の保存と利用について私が見聞したところをのべてみたい。

私が今回3カ月間通い、利用したのは、オランダのアムステルダムにある、社会史国際研究所 (Internationaal Instituut voor Sociale Geschiedenis, Amsterdam) の図書室である。この研究所は、ヨーロッパ近現代の思想家、たとえばマルクス、ヒルファーディング、カウツキーなどの「手稿」類、手紙、ヨーロッパの社会運動史、労働運動史の諸資料 (新聞、パンフレット) と関連する書籍を多数所蔵している。

各国の研究者やオランダの学生が、論文作成のためにここを利用している。利用者はまず各資料の「目録」にしたがって、資料を請求し、フォトコピーによってそれを閲覧することができる。問題はオリジナルによる閲覧である。オリジナルによる調査が必要な場合には、その理由を説明し、帰国する月日をつけると、帰国直前に別室において監視つきで閲覧が許される。



社会史国際研究所 (アムステルダム)

私の経験によれば、オリジナルの「手稿」類は、補修はなされているものの、破損がはなはだしいものが多かった。したがって、通常はフォトコピーによる閲覧となるのはやむをえないと思ったが、フォトコピーの状態は、文字の太さなどの点で、オリジナルとかなり異なっているという印象を強くうけた。フォトコピー自体がすでにだいぶ以前になされているためであるが、今日の写真技術の水準によれば、よりオリジナルに近いものが得られると思われる。

もう1つの問題はこの研究所の資料を論文などで引用する場合 (1カ所7行以上の引用)、研究所の事前許可が必要となる点である。こうした手続は他の研究所においてもとられているところもあるが、研究者にとっては大へん気をつかう面であり、実際にいくつかのトラブルがおきている。

しかしこの研究所は全体として大へん開放的であり、利用者にとっては、快適な環境を保障してくれた。もともとアムステルダムの中心街にあった研究所は、資料増大にともなって、数年前にアムステルダム郊外の工場団地の一角に移転してきた。ある日、この同じ工場団地内で事故がおき、多数の消防自動車が研究所の近くで待機した。もちろん研究所に直接被害はおよぶことはなかったけれども、貴重な資料を保存する研究所が、工場と隣接する問題をみせつけられた思いがした。

ところでこの研究所には、昼食・飲物をとれる軽食堂がついている。オランダ人は概して軽い昼食をとるが、議論ずきで、外国からの研究者もまじりにぎやかである。ここはさすがに社会史国際研究所というだけあって、研究者も司書もオランダ語の他、英語、フランス語、ドイツ語をこなし、さらにはロシア語、イタリア語、スペイン語も通用する。英語はたしかに国際語であり、「国際化」時代になって、英語は必須であるが、ヨーロッパ大陸では必ずしも一

般的でないところがある。フランス語やドイツ語があわせて必要であり、英語をおぎないかつ英語の理解を深めてくれる。

研究所の図書館といえば、私は、ドイツ民主共和国、ベルリンの「マルクス・レーニン主義研究所」(Institut für Marxismus-Leninismus) 附属図書館を1週間にわたり利用する機会をえた。この図書館はいうまでもなく、この国の支配的政党であるドイツ社会主義統一党 (SED) の附属図書館という性質をもっている。「マルクス・レーニン主義」に関連する文献の他に、社会主義や労働運動史に関する資料、新聞、パンフレットも多数所蔵している。目録は著者別、書名別、テーマ別に整理されており、雑誌論文も分類されている。またこの研究所の「マルクス・エンゲルス部」にも図書室があり、現在刊行がすすめられている『新マルクス・エンゲルス全集』(MEGA) 編集にかかわる資料・文献を所蔵している。またマルクス・エンゲルスの「手稿」類、「手紙」類を全てフォトコピーで所蔵し、かつマルクス・エンゲルス自身の所蔵本(書き込みあり)を複製で保存している。



マルクス・レーニン主義研究所 (ベルリン)

マルクス・エンゲルス部の図書室に於ける研究員との研究討論会

残念なことであるが、さきの社会史国際研究所とこの研究所のフォトコピーは複写することとはできない。したがって、ひたすら筆写しなければならない。ここに限らず、ヨーロッパでは今日でも筆写が基本的な作業の1つとなっている。コピーが氾濫し、コピーすることによって内容を読んだと錯覚するくらいのある日本人にとっては、大へん教訓的なことがらであるように思われる。

さてヨーロッパで最大の図書館はなんといってもロンドンの British Library であろう。British Library は British Museum の内部にあるが、組織は別となっている。British Library 自体も Reading Room を中心として、Official Publications Library (OPL), Newspaper Library (場所は Colindale), Department of Manuscripts などにわかれている。私の利用した Department of Manuscripts の Students' Room は、閲覧にあたりあらかじめ application form を送り、利用許可を得ることが必要である。直接行くと、いろいろの調査があり、時間をとられる。

まず「手稿」類についてのぼう大な目録(その一部は複製が北大附属図書館にある)のな

かから必要なものを請求すると、オリジナルの整備・製本された「手稿」類、「手紙」類が手もとにとどけられる。専用の閲覧台が備えられており、読者は細心の注意を払うことを求められるのは当然であろう。

私はチャールズ・バビジ (Charles Babbage) の「手紙」類を閲覧したが、最初の日、請求したものは、他の利用者のために利用できなかった。自分と同じものを研究している人が同時にいるのを知り、驚きもしたが、考えてみればヨーロッパではオリジナルにもとづく研究でなければ研究としてはみとめられないという点をよく認識する必要がある。さらばこそ、「手稿」類、「手紙」類の整理、製本、目録化がすすめられ、図書館の一部門として確立しているのである。

パリの Bibliothèque Nationale やジュネーブの Bibliothèque Publique et Universitaire においても、同じく Manuscript 部門があり、British Library と類似の方法で整備されている。ただし、パリの Bibliothèque Nationale を利用するさいには日本のフランス大使館からの紹介状が必要であり、さらに閲覧料を支払わなければならなくなっている。

以上3つの図書館はいずれにおいても「手稿」類のフォトコピーを依頼することができる。費用と時間はそれぞれ異なるが、研究にとって大へん有益であるのはいうまでもない。

もともとヨーロッパはアンティークが好まれるところであり、第2次大戦による戦災をうけた建物を何年もかけて復旧する土地がらである。古いものほど価値があり、それだからこそ保存するという文化的伝統が「手稿」類の保存の背景にあることを指摘しておきたい。

「手稿」類の保存にかぎらず、記録の保存についてもかなり徹底している。これに関連して私の経験を1例のべてみたい。『北大時報』第365号にも紹介したところだが、私は『資本論』第1巻第13章に広範に利用されている匿名の書『諸国民の産業』第II部 (*The Industry of Nations. Part II, 1855*) の著者を調べるべく、この本の発行元である、キリスト教知識普及協会 (Society for Promoting Christian Knowledge) を、ロンドンのメアリーレボーン・ロードに訪ねた。アーカイヴィストのベイカー氏はさっそく、一般学問・教育委員会 (Committee of General Literature & Education) の議事録をいっしょにひもといてくれた。1850年10月18日の議事録によれば、ロバート・エリス (Robert Ellis) に執筆を依頼したが拒否され、1851年6月27日の議事録で同じエリスの申し入れにより執筆が引き受けられたことになっている。さらに著作権料として30ポンドが支払われ、1852年6月から10月にかけて第I部が出版されていることも議事録にしるされている。著者のエリスは、British Library の出版目録によれば、The National Society's Training Institution の外科医であって、1851年の万国博覧会の公式カタログ作成に加わり、さきの協会から『創造の化学』(1850年) という本も出版している。以上のことが、今も残されている発行元の記録と British Library の出版目録から明らかになったのである。

「高度情報社会」のかけ声のもと、「古い」ものを安易に捨て、玉石混交の「新しい」情報を追い求め、その情報も10年たてば価値がなくなってしまう、というようなことにならない見識こそ求められているのではないだろうか。

学術資料掛への道は遠いのか

大学院環境科学研究科図書室

「いつも静かな閲覧室」「明るくさすが環境図書室はカンキョウが良い」……事務局北側に北大の中でもひととき高さを誇る8階建の研究棟、これが大学院環境科学研究科である。

図書室は、昭和52年4月本学に本研究科が設置されて以来、「古河記念講堂」(昭和55年3月まで)での時期を含め8年の歴史をへているが、未だ新しきイメージをかもし出している。十分な知識を持たぬまま思うにそれは、蔵書冊数や図書室の機能に起因するのかもしれないが、設立当時考えられていた本研究科図書室のめざすべき姿が完成されておらず、明るく、静かな閲覧室をもつ図書室のまま時間がたってしまったからだろう。現在雑誌の受入日付印には「学術資料掛」と記されている。部局図書室としての機能はもちつつ、環境研が必要とする図書室は、より専門性を求めていることが「学術資料掛」に出ている様に思う。

設立当時からの図書室に関する文書を目にしたり、教官・院生と時にはお酒を酌み交しながら図書室への希望を耳にするにつけ、早く掛員も複数体制をもつ、学術資料掛が実現してほしいと強く感じるのである。

しかし、大学予算、特に図書館資料費の実質マイナスの状況にある中で、早期に実現することは夢であろう。

他部局、他大学資料に大いに依存している当研究科の教官・院生達。このことは図書室業務の中でも、相互利用依頼書、部局間複写機使用、文献複写依頼件数等の数字から見る事が出来るが、このことは、単に当研究科に資料が少ないということにはならない。すなわち、本研究科がもつ幅広さの研究・教育を表わしている。「環境科学」(本年度から環境化学講座が(理)に設置されたが)という分野については、「榆蔭」No. 43で斎藤先生が書かれておられ、又、当研究科要覧に、開設の理念、研究・教育の内容として書かれているが、全人類の福祉向上に貢献する学問とされている。

1人で部局図書室における業務を全て担うことは、現実にはたいへんであるが、当研究科の目指すものが、より図書室の姿に反映された時、「榆蔭」に大きくスペースをとって、特色ある図書室として紹介出来るであろう。しかし、現実のたいへんさは一方では、利用者や一つ一つの資料との結びつきが強いことを表わしていることも事実である。

「北大にはすばらしい宣言文があります」と今年3月松井愈先生(理)に教えていただいたのが、北海道大学通則第1章、第1条*であります。大学という大きな機構がもつこの宣言文は、当研究科開設の理念にも生かされている様に思う。こうした宣言文、開設の理念を意識して図書業務を続けることは、当面は、利用者へのサービス向上という点で生きてくと思うが、将来は、より幅広いもの(それは何んであるのかははっきりつかんではないが)になると思いつつ、頑張っていきたい。

*北海道大学通則第1章第1条「本学は、教育基本法に則り、学術文化の中心として広く知識を授けるとともに、深く専門の学術を教授研究し、平和的民主的な国家社会の形成に寄与することを目的とし、かつ、最高の教育機関として国家社会の向上を図りもって人類の永遠の平和と福利に貢献することをその使命とする。」

当研究科開設の理念については、当研究科要覧を参照していただきたい。

(環境研図書室 山 田 勉)

北海道大学図書館オンラインシステム

——利用者優先のシステムを目指して

北海道大学図書館システム設計実施部会

0. はじめに

北海道大学図書館オンラインシステムは、来年度早々にも、システムの中核部分の稼動を予定している。システム設計実施部会と附属図書館学術情報課において、4月以来基本構想が検討され、今夏8月末には、システムの基本設計を終了する段階に至っている。

図書館の電算化については、その原初形態の出現以来、ほぼ20年の歳月が経過しており、その間、業務の上で直接の係わりをもつ図書館職員はもとより、図書館の利用者にとっても、大きな関心事であった。しかし図書館電算化に対する具体的なイメージ、すなわち一体何がどのように電算化され、利用者にはどんな影響があるのかという点については、飛び交った情報量に見合う程には鮮明であったと言い難い。

本稿では、北海道大学図書館（部局図書館・室を含めてこの表現を用いる）のオンラインシステムが何を目指し、利用者にとってどのようなものになるのかという点に焦点を絞り、システムの概要を述べ、システム設計実施部会の中間報告とすることとする。

1. 北大システムの目指すもの

北海道大学オンラインシステムは、全国的には学術情報システムの一環として機能する。したがってシステムを構想する上で常に学術情報システムと対応をとっていくことが義務づけられている。

では学内的には、北大システムは図書館のいかなる問題を解決し、どのような業務を電算化の対象とするものであるのか、システムの目指すものについて以下に述べる。

1・1 オンラインによる全学総合目録の作成

北海道大学図書館において、利用者側からの最大の問題点は、大学内の資料の所蔵状況を容易に把握できないことである。

確かに各々の図書館・室単位ごとのカード目録はあるが、全学の総合目録は附属図書館にのみ編成されている。しかも全学総合目録とはいえ、附属図書館所蔵分の70万冊、すなわち本館分と法学部分を除くファイルであり、移管等による配架場所の更新も行われていない不完全なものであり、著者名による検索しかできない。したがって、これまで利用者は自分の所属する部局の図書館・室以外の蔵書を知るためには、附属図書館に問合せるか直接何所かの図書館・室に足を運ばなければならなかった。他大学や外国の図書館蔵書の検索ではなく、学内の所蔵調査にすら多くのエネルギーを費さざるをえなかったのが、残念ながら北大の現状である。

北大システムでは、まず第一に、この問題を解決すべき課題であると判断した。すなわち、全学一本の図書・雑誌の総合目録（書誌情報と所在情報）データベースを構築し、それを全学の図書館・室に配置された端末からオンラインで検索すること、同時にその検索システムを利用者にまで開放することをシステム的最優先要件とした。

オンラインによる全学総合目録の作成とは、個々の図書館・室が自己の目録作業をすることにより、自己の分割目録を手にするのではなく、各々に全学の総合目録を手に入れることである。したがって個々の図書館・室は分担・共同して全学総合目録を作成すると考えるのが妥当である。

こうして形成される全学総合目録は、従来の分割目録では果しえなかったさまざまな機能を発揮するものである。

利用者（図書館職員も含まれる）側からは、まず、最寄の図書館・室から他人を介すことなく直接に全学の図書・雑誌の即時検索が可能となる。また、著者・書名・分類記号からはもとより書名中の重要語や各種の図

書コード類など豊富なアクセス・ポイントからの多面的なアプローチが可能となる。更に従来のカード目録における編成までのタイムラグが解消され、整理の終了と同時に検索が可能となるので、最新の所蔵状況を把握することができる。

一方図書館業務の側面からは、基本的にはカード目録は凍結・廃止となるので、カード目録編成という非常に負担の大きい作業から解放されることになり、そのことによる省力効果は測り知れない(年間受入冊数8万冊に対して著者・書名・分類・事務用の4種のファイルを編成するにしても32万枚のカード編成作業が必要である)。また全学総合目録データベースの形成は、各部局図書館・室からの分担目録作業として行われるので、単年度でも20%に及ぶ学内の重複資料の書誌作成の手間が省け、合理化・省力化が期待できる。

従来、部局の枠を越えての重複調査は、意思はあっても事実上不可能な作業であったが、全学総合目録データベース形成後は、発注依頼者および発注担当者が必要に応じて調査を行えるので、学内の資源共有という新しい次元から資料収集・選書を考える道が拓かれる。

勿論このような成果は、データの蓄積量が前提となることは言うまでもない。稼動時点では雑誌以外は新規受入れ分のデータしか期待できない。部分的であっても、利用効率の高い週及入力を将来計画として持つ必要がある。

なお全学総合目録データベースの形成における書誌情報の生成については、2・2 図書情報管理システムと2・3 雑誌情報管理システムを参照のこと。

1・2 利用者に開放されたオンライン蔵書検索システムの実現

1・1 で形成された全学総合目録データベースに対して利用者でも図書館職員の助けをかりずに容易に検索が可能である蔵書検索システムの実現、これが北海道大学図書館オンラインシステムで、次に目指したことである。

これは OPAC (Online Public Access Catalog の略)、オンライン閲覧用目録というアメリカでもようやく最近になって脚光を浴び始めた考え方を北大システムで実現することである。

これまでの図書館電算化システムではオンライン検索システムが開発された場合でも、業務用として使用されることが前提であり、中央館・分館レベルの図書館でようやく1~2台の利用者端末を配置した例が見られるが、こうしたケースすらむしろ例外的な措置と言えた。

北大システムでは発想の転換を図り、利用者用として検索システムを開発し、同じものを業務用としても準用することとした。

このようなオンライン蔵書検索システム実現のためには、利用者にまで開放するだけの機器構成つまり端末台数の確保という物理的条件を整えることと、JOIS や DIALOG といった情報検索システムのように、検索手法や操作法に一定程度の習熟を要するシステムではなく、いわばキーボードを打つことが最大の障害となる程度の初心者にも操作しうる北大独自の検索システムの開発が必須の要件となる。

機器構成については3.で蔵書検索システムについては2・1と4.で詳細に説明する。

1・3 北大システムの対象業務とシステムの特徴

すでに見たように、北大システムとは、図書館が直面する問題点を解決する一つ的手段としてオンラインで全学総合目録データベースを作成し、それを全学の利用者が検索するシステムであると集約できる。換言すれば、書誌・所在情報の蓄積と検索が大きくクローズアップされたシステムであると言える。

このシステムの基本理念を支援するために、検索のシステムと図書と雑誌の書誌・所蔵情報の生成のシステムと所在情報の管理(貸出・返却を含む)のシステムが必要である。すなわちこれらが第一期の電算化対象業務となる。

したがって、発注・受入・支払いおよび予算管理については第二期計画とし、第一期の諸システムの稼動・達成状況を見た上で開発に着手することとした。現状では、これらの業務の電算化は合理化・省力化の効果に疑問が残っており、また費用対効果も悪い(プログラムを自主開発しなければならない)。

北大システムにおけるこのような開発順序の採択は、他館の電算化システムに比して際立った特徴となっている。電算化先行館においてはいずれも、文献情報センターの目録システムが不確定であったという制約もあって、いわゆるハウスキーピング業務の電算化を先行させて開発してきたからである。

北大システムでは、先行館の開発状況から教訓を得て、現状の「掛」単位の業務をそのまま電算化の対象とするのではなく、検索、書誌データの入力、所在情報の管理というように機能別に図書業務を捉え直し、その機能を電算化していく考え方に到達した。

このような選択により、北海道大学図書館の電算化が、利用者の見えない部分からではなく、利用者にも影響のある部分あるいは利用者サービスを向上させる部分から着手することに繋がっていると確信する。

2. 北大システムの概要

全学の図書館・室をオンラインでつなぎ、単に業務用として使用するだけでなく、利用者にまで端末を開放し、学内のどこからでも全学の図書・雑誌の所蔵がわかるという、それ自体きわめて素朴な理念を実現することが北海道大学図書館電算化の目的であると前に述べた。

しかしこの素朴な理念の実現すら我が国ではシステムの先例が極めて少ないのである。あらためて、現在の所与のコンピュータ資源の制約の中では、容易ならざることをシステム化しようとしているのであるという認識をもつ必要がある。すなわち、上記の目的一点を「実用的なもの」として実現するためには、システム全体の軽量化を図り、細部にわたっての厳格な取捨選択を行うことが肝要となる。このことを前提として、以下に北大システムの各サブシステムの基本構想を概略する。

2.1 蔵書検索システム

北大システムの中核をなすサブシステムである。そのことは検索という機能が図書館の利用面からも業務面からも最も共通の要素であるからである。また、従来データの構築があれば当然、結果としての検索があると考えられてきたが、実用的な応答速度を問題にした場合、検索システムは最もプライオリティの高いサブシステムと考えるのが妥当である。

2.1.1 利用者の使い易さを重視する

① 画面方式の採用

一般の情報検索システムのように、あらかじめいくつかの命令語を覚えてから操作するコマンド方式ではなく、画面の展開と最小限のファンクション・キー（命令機能キー）の使用だけで検索をすすめる画面方式を採用する。

② 容易な操作

マニュアル（手引書）を見たり、図書館職員の援助を受けなくとも、画面上の操作法の説明だけで操作できるよう工夫する。また処理の経過をわかり易くするため一画面一処理を原則とする。

③ 日本語の使用

画面上の操作法の指示などは日本語を使用することを原則とする。

2.1.2 蔵書の検索システムであることを念頭におき設計する。

① 既知の書誌情報を持っている利用者が確実に、迅速に検索できること。

② 部分的あるいは不完全な情報でも検索できること。

2.1.3 使い易いシステムの条件として、次の3項を指標とする。

① 画面の切り換えを最小限にする。

② ファンクション・キー（命令機能キー）の使用を最小限とする。

③ 文字キーの打鍵を最小限とする。

これらの指標は蔵書検索システムに限らず、システム設計全般にわたって、システム部会の議論が別れた際などのレフェリーとした。

2.1.4 一度の検索でもれなく北大の蔵書を検索できるようにする。

図書、雑誌、和書、洋書といった具合にあらかじめそれぞれ検索対象を限定するシステムでは、図書と雑誌の境界、和書と洋書の境界などがあいまいで検索もれが生じる恐れがあるので、無条件に全ファイルを検索する方法を主たる検索法とし、対象を限定した検索も可能とする（再現率を確保した上で精度を高める）。

2.1.5 検索できる項目（以下検索語という）は次のとおりとする。

① 著者名（著者、訳者、編修者、注釈者など著作の成立に関与した個人あるいは団体）

- ② 書名(叢書・シリーズ名・シリーズの個別書名などを含む)
- ③ 書名中の重要語(キーワード)^(注)
- ④ 分類記号
- ⑤ ISBN, LC-No, JP-No, ISSN などの資料識別番号類
- ⑥ 北大資料番号(登録番号)

なお、これらによって検索した結果を出版者、出版年によってさらに限定する方法はシステムの応答速度を考慮して後日決定する。

(注) 書名中の重要語を採用したのは、あくまでも書名検索の補助手段としてである。すなわち2・1・7で述べるように検索語には文字数の制限があるので、一部に同定不能のものが生じる。その際にこの重要語との論理積をとり、検索結果を絞り込むためである。また冒頭書名が不明であるような場合の検索に対応するためのものである。重要語が資料の主題を表現している限りにおいては主題検索の結果と同じ効果があるが、そのことをもって重要語を統御された件名標目(主題語)と拡大解釈することは大きな混乱を招く。

このシステムにおける主題検索の基本は分類記号によることとする。

2・1・6 検索に使用する文字

- ① カナ文字、ローマ字(大文字のみ)、数字およびキーボード上の一部記号に限定する。
- ② ロシア語やギリシア語のようにローマ字を使わない言語はローマ字に翻訳した形を使う。
- ③ ドイツ語のウムラウトとフランス語のアクサンなどの各種記号は無視した形で検索する。
- ④ 中国語や朝鮮語については文情センターの決定を待って検討することとする。

(ここで規定しているのは検索の際に使用する文字であって、記述や検索結果の表示に使用される文字ではない)。

2・1・7 検索語の文字数と語数の上限

- ① 同定するためには文字数が多い程よく、検索者の負担を考慮し打鍵数を少なくするためには文字数は少ない程よいという背反する側面がある。北海道大学総合目録(カード目録)および英国図書館(BL)の雑誌目録等を対象とする無作為抽出による統計の結果、書名についても15文字前後で同定に十分であることが判明したので、15文字前後を基準にしてファイルの効率的利用にふさわしい文字数をシステム・エンジニアと協議して決定することとした。
- ② 語数については、理論的には無制限とするのが望ましいが、実際の運用上ではかえって検索される可能性の極めて低い語までを入力する恐れがあるので、一資料に対する検索語全体で、15件前後を上限とすることと検討する。

2・1・8 検索に使用する手法

2・1・5において入力する検索語については、完全一致(入力した文字と完全に一致するものを探し出す)と前方一致(入力した文字と同じ文字を前方にもつものを探し出す)の二つの方法を選択できるようにする。また、複数の検索語を入力できるようにし、検索語間の関係は「論理積」で処理する(論理和、論理差は使用しない)。論理積は5重前後を想定する。

入力された検索語は、書名であれ著者名であれ、書名中の重要語であれ無条件に探し出す方法を基本とし、検索語の種類指定も可能な画面を工夫することとする。

2・2 図書情報管理システム

2・2・1 処理対象業務

図書情報管理システムでは次の各項を電算化処理の対象業務とする。

- ① 発注/受入
- ② 支 払
- ③ 書誌・所在情報作成/修正
文情センター接続入力・北大単独入力
- ④ 統 計

なお、③を除く業務については2期計画である。

2・2・2 書誌・所在情報の作成（文情センター接続入力）

北大システムにおける書誌・所在情報の生成（目録作成業務）は文献情報センターの提供する目録システムと書誌データベースを最大限に活用して行なうことを基本方針とする。

文情センターとのデータのやりとりの形態として次の3つがある。

① 図書ファイルから単純に書誌データが利用できる場合

文情センターの全国総合目録データベースに、すでにどこかの図書館が書誌データの登録を済ませていてそれが利用できるときは、所蔵レコードのみを作成すればよい。しかし文情センターと参加図書館の接続が試行的段階にある現段階では、この全国総合目録データベースは空に近い。

② 参照ファイルの書誌データが利用できる場合

文情センターには LC-MARC (200 万件)、JAPAN MARC (50 万件)、UK-MARC (100 万件) などの参照ファイルがあるが、ここに該当の書誌データがある場合、それを流用（コピー）し、必要な修正を加えるなどして使うことができる。しかし、ここで注意すべきことは、従来考えられていたように、所在情報のみを追加し登録するという単純なものではなく、「著者名典拠」「統一書名典拠」といった文情センターの強力な書誌調整をくぐりぬけて漸く可能になるということである。

③ オリジナルレコードの作成

①にも②にも適当な書誌データが見つからないときは、文情センターの「入力データ記述文法」に従って書誌データを作成する。②で述べたように、典拠ファイルとのリンクづけの作業も当然含まれる。

2・2・3 書誌・所在情報の作成（北大単独入力）

① 北大の書誌ファイルを持つことについて

北大システムにおいては、応答速度、接続経費あるいはファイルの管理等を勘案して、全学の書誌・所在情報を北大の全学総合目録ファイルとして持つことが現実的な方法であると判断した。しかし文情センターのように参照ファイルあるいは典拠ファイルを持つことはしない。

② 北大全学総合目録ファイルの構造

文情センターの図書ファイルと同様に北大ファイルにおいても1資料1書誌レコードを原則とする。

また叢書・全集等の集合書誌レベルと単冊ごとの単行書誌レベルの階層構造を採用する。

データの精粗およびデータ項目についても文情センターファイルと同一とはかぎらない。

③ 北大単独入力

文情センターと交信せずに北大ファイルにのみ登録するものとしては、製本済み雑誌、詳細な所在情報、複本（迅速な処理と通信経費節約のため）あるいは文情センターファイルに登録を要しない資料等があげられる。

なお、北大ファイルの入力画面も文情センターの「参加館画面処理プログラム (SUA)」に準拠して作成することを検討しているが、技術的に問題が多い。

2・3 雑誌情報管理システム

2・3・1 処理対象業務

雑誌情報管理システムでは次の各項を電算化処理の対象業務とする。

- ① 受入準備（受入雑誌選定のための資料作成/予約および契約に伴う資料作成）
- ② 受 付
- ③ 督 促
- ④ 支払/精算
- ⑤ 製本/図書登録
- ⑥ 雑誌所蔵目録作成（所蔵巻号自動編集）
- ⑦ 統 計

2・3・2 雑誌検索システム

北大システムにおける検索システムは2・1でも述べたように、図書・雑誌の区別を問わない、横断的な検

索を前提としているが、検索対象が雑誌であるか図書であるかをシステムが判断した段階で検索画面の展開は違ったものとなる。図書では、所在が示される時点が検索の最終段階となるが、雑誌では、所在が示されるのは、所蔵全巻号をオープン・エントリー式で表示する画面であるが、これに加えるに最新受入状況および資料番号単位の所在情報を知るために、雑誌受入状況表示画面と製本雑誌巻号・所在表示画面が用意される。したがって、利用者は、一定の時点までの所蔵全巻号とその所在場所および未製本雑誌の受付状況と所在場所を知ることができるのみならず、製本単位に含まれる巻号および所在（貸出状況も含む）を知ることができる。具体的な画面の例としては5.を参照のこと。

2.3.3 提供される情報の形式

① 書誌情報

文情システムの雑誌書誌ファイル（現在は学術雑誌総合目録の書誌部分）からの取り込みを前提としているので、書誌情報はこれに準じたものとし、ISBDの区切り記号によって編集して表示する。

② 所蔵全巻号レベルでの所蔵・所在情報

雑誌の所蔵情報には所蔵全巻号、発行される一冊（号）単位（受付単位でもある）、および製本単位の三つのレベルがある。一方、所在場所としては、未製本雑誌配架場所・製本業者・製本雑誌配架場所の三つが基本的には考えられる。このため所蔵と所在の関連を一挙に表示することは不可能である。したがって、所蔵のレベルに対応して、それぞれに所在情報を付与する形をとる。

所蔵全巻号レベルでの所蔵・所在は文情センターに報告するものである。したがって、このレベルでの所蔵・所在は文情センターの雑誌データベースにまったく対応したものとなる。

③ 一冊（号）単位レベルでの所蔵・所在情報

従来の受入記録簿のイメージである。日常の受付業務に使用するのと同じ画面を利用者に開放する。このことにより、最新の受付状況、製本中かどうかを知ることができる。

④ 製本単位レベルでの所蔵・所在情報

北大システムでは、製本雑誌は図書として扱われ、資料番号を製本単位毎に有している。しかし、蔵書検索の際製本雑誌を一般図書と同様に検索対象としたなら、該当件数が多くなりすぎ非常に使いにくいものになってしまう。このため製本単位レベルでの所蔵・所在情報は、通常の検索では図書と一緒に表示されないようにする。しかし、貸出中を含む所在情報、あるいは一製本単位に含まれる号を知るために、このレベルでの所蔵・所在情報が必要となるので、②の検索から、選択して、製本雑誌巻号・所在表示画面へ展開できるようにする方法を検討している。

2.4 所在情報管理システム

2.4.1 システムの意義

このサブシステムは、北大の全蔵書の所在情報の管理をオンラインリアルタイムで一元的に把握し提供するものである。北大全学総会目録データベース中の資料については、連動して書誌情報をもつ（在庫管理方式）。このことによって、貸出・返却および長期にわたる学科、教官への貸出あるいは図書館・室内の所在箇所変更等の業務に対応しようとするものである。

2.4.2 処理対象業務

① 利用者登録

学生（MT）からの登録

教職員登録

② 一般貸出

貸出/返却

問合せ/予約

督促

③ 研究室貸出/配架場所変更

④ 閲覧統計

2・4・3 貸出/返却システムの変容

当面附属図書館と教養分館だけに限定されるが、貸出/返却は OCR ハンドスキャナで利用者番号と北大資料番号を読みとるという作業だけになる。従来の方法のように、利用者自身が請求記号、書名、著者名、利用者名、住所等を記入するという手間は軽減される。ただし、利用者 ID を所持していなければ、このシステムによる貸出を受けることができない。

なお、OCR ハンドスキャナのない図書館・室においても、利用者番号、資料 ID をテンキーから入力することで、このシステムを採用することができる。

2・4・4 利用環境の整備

現在、各図書館・室はそれぞれ異なる閲覧規則を持ち、単独で閲覧業務を行なっている。これをそのままシステムに導入し、従来通り各図書館・室毎に貸出/返却を行なうとしたら、システムへの負荷は非常に大きなものとなる。したがって、このオンラインシステムで貸出/返却を行うためには、全学一律に適用される「オンラインによる貸出細則」(仮称)を整備することが必要不可欠の条件となる。

つまり、ここに至って、全学の蔵書は全学の利用者に開かれた存在となる。このことは図書館のもつ本来の理想を実現するものであるが、同時に予測出来ない障害を生じることも考えられるので、各図書館・室の事情を汲みとった設計を行い慎重な運用を図りたい。

2・4・5 蔵書管理の観点から

所在情報の管理は全学一本であるが、蔵書の管理は部局単位で行われている。こうした実態に即したシステムの設計にあたる必要がある。

すなわち、蔵書管理上からは、貸出した場所に返却されなければ、現状では混乱の原因となる。理想としては学内のデリバリーシステムが考えられるが、その場合でも尚更、貸出し場所が問題となるので、このシステムでは、貸出し場所が判定できる機能を備える予定である。

3. 北大システムにおけるコンピュータについて

3・1 機種選定

本年4月上旬より7月末まで前後6回にわたり開催された機種選定委員会において、詳細な検討がなされた結果、北大システムのコンピュータとして NEC 日本電気株式会社の新しい(昭和60年12月出荷開始)コンピュータ ACOS システム 610 モデル 10 が選定された。

選定にあたっては、北大システムの目的を十全に実現するため次の諸点がポイントとされた。

- ① 全学のオンラインネットワークの構築が可能なこと。
- ② 利用者でも使える蔵書検索システムが可能なこと(機器構成とプログラム開発)
- ③ システムの応答速度が実用的であること(100万冊の書誌データ中、該当するものが100件あった場合の検索が5秒程度で行えること等の具体的条件を4つ付けた)。

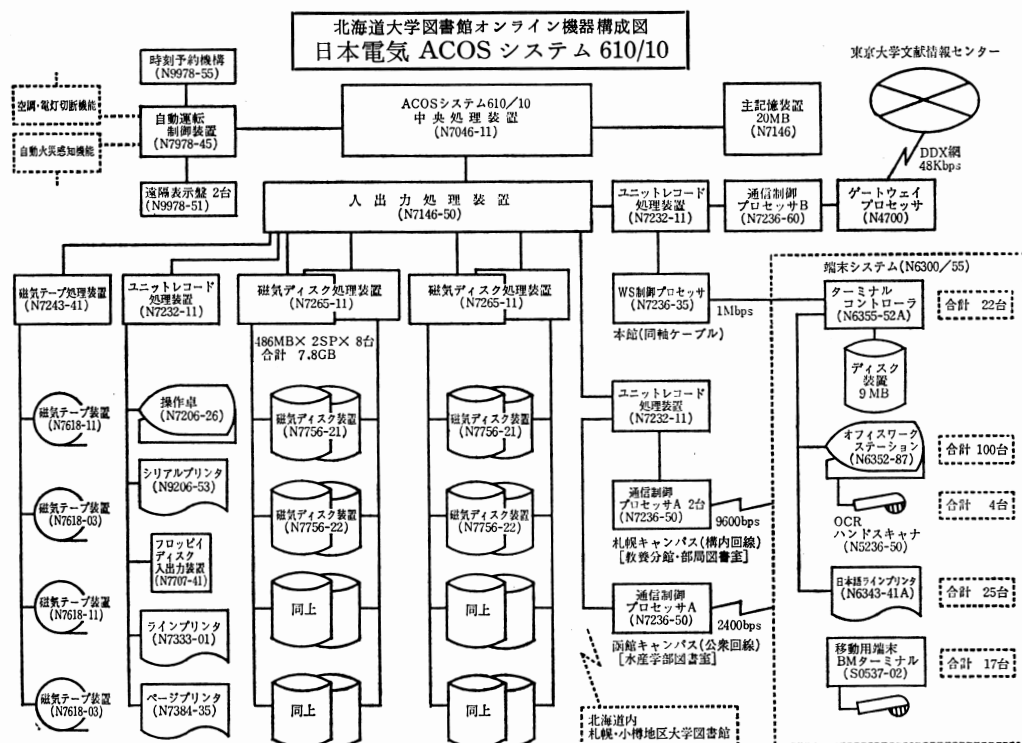
その結果、中央処理装置の処理能力、主記憶容量、通信制御関係、端末台数、応答速度等について上述のコンピュータが北大システムにとって適切であると判断され選定された。

保存庫内図書の移動

農学部の増改築に伴い、旧附属図書館保存庫が取り壊されることになったため、同保存庫内の図書約9万冊が去る7月15日から19日にかけて附属図書館内に移されました。
(閲覧課)

3・2 機器構成と端末機器設置計画

北大システムの機器構成の詳細は下図の通り。



端末機器設置計画は、年間の受入図書数・雑誌種類数を基準とし、奉仕対象者数・相互貸借件数を参考として次表の通り図書館委員会で決定された。

図書館室・名	端 末		ブリ ンタ	OCR スキャ ナ	ハンデ イスキ ャナ	図書館・室名	端 末		ブリ ンタ	OCR スキャ ナ	ハンデ イスキ ャナ
	業務用	利用 者用					業務用	利用 者用			
図書館本館	14台	5台	6台	2台	4台	獣医学部	1台	1台	1台		1台
教養分館	4	3	1	2	2	環境研		1	1		
文学部	5	1	1		1	低温研		1	1		
教育学部	2	1	1		1	応用電気研		1	1		
法学部		1				触媒研		1	1		
経済学部	3	1	1		1	免疫研		1	1		
理学部	3	2	1		1	スラブ研		1	1		
医学部	4	2	1		1	医療短大		1	1		
歯学部	1	1	1		1	教養部		1			
薬学部	1	1	1		1	言語文学部		1			
工学部	5	2	1		1	水産学部	3	1	1		1
農学部	5	2	1		1	合 計	51	33	25	4	17

注1. 研究所レベルの図書室では業務用と利用者用を兼ねる。

2. システム開発用端末6台，利用者・図書館員・地区大学図書館員教育用端末10台

4. 北大蔵書検索システム画面の展開

北大システムにおける蔵書検索システムの意義と設計の基本構想については1・2および2・1で述べた。ここでは蔵書検索模擬画面を用い、実際の検索の流れを見ることが出来る。

北海道大学蔵書検索システム

* あなたが探したい図書あるいは雑誌の「書名」「著者名」「分類記号」「書名の中の単語」あるいは「図書コード」のいずれかを、タイプしてから「実行」キーを押して下さい。

検索語 該当件数

WESTERN RELIGION 1 件

* 検索にあたって条件設定をする必要があるなら「条件」キーを押して下さい

図1 蔵書検索基本画面

利用者用端末には常に電源が入っており、この画面が表示されている。ここでは WESTERN RELIGION という書名の図書を検索している。検索語を入力し実行キーを押すと図2になる。なお、この画面では無条件かつ完全一致のみである。

北海道大学蔵書検索システム

* あなたが探したい図書あるいは雑誌の「書名」「著者名」「分類記号」「書名の中の単語」あるいは「図書コード」のいずれかを、タイプしてから「実行」キーを押して下さい。

検索語 該当件数

WESTERN RELIGION 1 件

■ 件

* 検索語をさらに入力する場合は、次の入力欄にタイプし「実行」キーを押す
* 検索結果を表示する場合は「実行」キーを、検索しなおしは「終了」キーを押す

図2 蔵書検索基本画面(続き)

この画面ではカーソルの位置が2個目の検索語の冒頭にきており、1個の検索語の入力ではヒット件数が多い場合、2個、3個と検索語を入力していくことができる。検索語間は自動的に論理積がとられる。この例ではヒット件数が1件なので実行キーを押すと図3の画面になる。

書誌詳細・所在表示 所在冊数 3冊 現在まで 3冊 残り 0冊

Western religion : A country by country sociological inquiry / Ed. by Hans Mol. ; Margaret Hetherington ; Margaret Henty. - The Hague : Mouton, [1972]. - 646p. ; 24cm. - (Religion and reason ; 2). Includes bibliographies. ID:0007255

T=WESTERN RELIGIO A=MOL,HANS A=HETHERTON,MARGA H=HENTY,MARGARET
A=MOL,J.J. W=RELIGION W=SOCIOLOGICAL W=INQUIRY

所在場所	貸出状況	請求記号	出版年	資料番号
① 図書館蔵書・西洋図書	貸出中	DC16:261.8	N73	1978 002000445X
② 法学・法令所蔵		DC16:261.8	N73	1981 122008785X
③ 法学・小杉太郎		DC16:261.8	N73	1985 122009875X

次頁→前進 前頁→後進 終了/再検索→終了

図3 書誌詳細・所在表示画面

中央で画面分割されており、上段が書誌詳細表示、下段が所在表示の部分である。上段、下段とも前進キーで次頁となり、それぞれの続き(が、あ、ば)見ることができる。

北海道大学蔵書検索システム

* 設定したい条件の番号を「テンキー」から入力し「実行」キーを押す
① 和図書=1 洋図書=2 和雑誌=3 洋雑誌=4 無条件=0 0
② 書名=1 著者名=2 分類=3 主要語=4 図書コード=5 0
③ 完全一致=0 前方一致=1 1

* 検索語をタイプしてから「実行」キーを押す

検索語 該当件数

ウイザイ 30 件

* 検索語をさらに入力する場合は「条件」キーを押す
* 検索結果を表示する場合は「実行」キーを、検索しなおしは「終了」キーを押す

図4 蔵書検索条件設定画面

図1の基本画面で条件キーを押すと、この画面が選択される。カーソルは右上の0のところに初期設定されている。①の各項目で設定したい条件があれば、その番号を入力し実行キーを押すと条件設定が行われる。条件設定しない場合は実行キーを押すのみでカーソルは次段に移る。この例では③で前方一致を条件として指定した。その条件の下でウイザイという検索語を入力し30件の結果を得た。実行キーを押すと検索結果が一覧できる図5の画面となる。

書誌簡略表示	該当件数	30件	現在まで	7件	残り	23件
① 無窮の経済学：新しい経済学入門 / 森嶋通夫著。 - 東京：岩波書店，1984。 - 326p. ; 19cm. - (岩波全書) ; 338) ID:0000002						
② 経済科学方法論 / K. シュミット著。 - 鈴木英寿訳。 - 板野友昭訳。 - 東京：成文堂，1984。 - 470p. ; 22cm. - (商業学・経営学叢書) ; 2) ID:0000015						
③ 小林昇経済史著作集。 - 東京：未来社。 - 1979。 [内容表示→○+実行] ID:0000067						
④ 小林昇経済史著作集。 - 9。 - 東京：未来社，1979。 - 463p. ; 22cm. ID:0000100						
⑤ マクロ経済学と日本経済 / 黒板住夫著。 - 酒田宏一著。 - 東京：日本評論社，1984。 - 278p. ; 22cm. ID:0000500						
⑥ マクロ経済学研究 / 古川洋著。 - 東京：東京大学出版会，1984。 - 282p. ; 22cm. - 参考文献：p261~276。 - ISBN 4-13-04027-7。 ID:0001000						
⑦ 現代の経済構造と労働関係：80年代の雇用と賃金をめぐる主要問題 / 角橋尚通編著。 - 東京：総合労働研究所，1985。5。 - 230p. ; 22cm. - (法政大学大原社会問題研究双書)。 - ISBN ID:0001125						
次頁→前選 前頁→後選 終了/再検索→終了 書誌詳細・所在表示→○+実行						

図5 書誌簡略表示画面

図4での検索結果が、一画面に7個まで簡略書誌が表示される。この画面は目指すものを見つけ出すまで真繰りが可能である。したがって30件を通覧するのに4回前進キーを押せばよい。ここでは③小林昇経済史著作集を検索した。「テンキー」から3を入力し実行キーで図7の画面へ。

書誌簡略表示	該当件数	30件	現在まで	14件	残り	16件
① 多国間経済の政治経済学 / 佐藤定幸著。 - 東京：有斐閣，1984。 - 258p. ; 22cm. - (有斐閣経済学叢書) ; 9) - ISBN 4-641-06417-2。 - 参考文献：p261~276。 ID:0002020						
② 有斐閣経済学叢書。 - 東京：有斐閣。 - 1980。 [内容表示→○+実行] ID:0003441						
③ 経済発展の理論：企業者利潤・資本・信用・利子および景気の回転に関する一研究 シュムペーター著。 - 坂野谷谷。 [注]訳。 - 東京：岩波書店，1980。9。 - 546, 17p. ; 22cm. ID:0004456						
④ 経済。 - 東京：新日本出版社。 [所蔵番号表示→○+実行] ID:0005756						
⑤ イギリス近代経済史 / W. コート著。 - 新井政治訳。 - 天川清次郎訳。 - 東京：ミネルヴァ書房，1984。 - 402, 31p. ; 21cm. - ISBN 4-13-04138-0。 ID:0005758						
⑥ 経済白書 / 経済企画庁編。 - 昭和58年版。 - 東京：大蔵省印刷局，1983。 - 374, 158p. ; 21cm. ID:0006022						
⑦ 経済評論。 - 東京：日本評論社。 [所蔵番号表示→○+実行] ID:0006123						
次頁→前選 前頁→後選 終了/再検索→終了 書誌詳細・所在表示→○+実行						

図6 書誌簡略表示画面(続き)

図5の次頁画面。この画面での所在表示は、1書誌に複数の所在があるので採用できなかった。

書誌簡略表示(シリーズ)	該当件数	9件	現在まで	9件	残り	0件
小林昇経済史著作集。 - 東京：未来社。 ID:0000067						
T=3H"ツシバ"ツシバ"ツシバ" A=3H"ツシバ" W=ツシバ"ツシバ"						
① 1巻 国家論研究 : 1 ID:0000068						
② 2巻 国家論研究 : 2 ID:0000200						
③ 3巻 イギリス産業主義研究 : 1 ID:0000300						
④ 4巻 イギリス産業主義研究 : 2 ID:0000079						
⑤ 5巻 J. スチュアート研究 ID:0005235						
⑥ 6巻 フリードリッヒ・リスト研究 : 1 ID:0000235						
⑦ 7巻 フリードリッヒ・リスト研究 : 2 ID:0000089						
⑧ 8巻 フリードリッヒ・リスト研究 : 3 ID:0000097						
⑨ 9巻 経済学史論 ID:0000700						
次頁→前選 前頁→後選 終了/再検索→終了 書誌詳細・所在表示→○+実行						

図7 書誌簡略表示(シリーズ)画面

ここでは全集・シリーズの各巻単位の書誌簡略表示を見ることができる。いま第7巻の書誌詳細と所在を調べたい。7と実行キーで図8へ。

書誌詳細・所在表示	所在件数	7件	現在まで	7件	残り	0件
小林昇経済史著作集 : 7。 - 東京：未来社，1978。12。 - 448p. ; 22cm. ID:0000089						
7 : フリードリッヒ・リスト研究 ; 2。 内容 : リスト「経済学の国民的体系」解説。 リスト「農地制度論」解説。 リストと経済学における歴史主義。 ID:0000089						
T=3H"ツシバ"ツシバ"ツシバ" A=3H"ツシバ" W=List,Friedrich W=List						
所在場所	貸出状況	請求記号	出版年	資料番号		
① 図書館書庫・図と図書	貸出中	DC16:330.1	Kob	1978	00123545X	
② 図書館書庫・法和図書		DC16:330.1	Kob	1981	121124585X	
③ 図書館開架・一般	貸出中	DC16:330.1	Kob	1985	001223487X	
④ 経済図書室		ND8:331.23	Kob	1984	171073456X	
⑤ 経済経済史・北海太郎		ND8:331.23	Kob	1983	171065555X	
⑥ 教養人文資料室		DC16:330.9	Ko	1978	701001862X	
⑦ 医短図書室		DC16 330.9	Kob	1983	861000674X	
次頁→前選 前頁→後選 終了/再検索→終了						

図8 書誌詳細・所在表示画面

この画面は図3と同じものである。下段の出版年表示は、同一版で刷の異なることを示す。なお、この画面の前頁は図7であり、別の巻の詳細画面を見たい場合は前断面に戻り作業を繰返せばよい。

雑誌簡誌所蔵番号・所在表示		所在件数	2件	現在まで	2件	残り	0件
経済評論。 - 東京：日本評論社。 - 復刊1巻1号(昭和27.1)。 - ISSN 0453-4786。 - ULPN 005693-0007。 T⇒イイイイ202 W⇒イイイイイ							
所在場所		所蔵番号表示				所蔵年	
①	図書館書庫・図と雑誌	2-12,13(1-6,8-12),14(1-9,11-13),15-33+				1953-1984	
②	経済図書室・書庫	1(2,4-12),2-33+				1952-1984	
次頁→前選 前頁→後選 終了/再検索→終了 受付状況→○+受付 製本→○+製本							

図9 雑誌所蔵巻号・所在表示画面

北大蔵書検索システムでは雑誌の検索も基本的には図書と同じである。図6で④を検索した例。所蔵巻号表示は、学術雑誌総合目録に準拠している。この画面から当該誌の最新の受付状況を検索するには所在場所を指定して受付キーを押す。

雑誌受入状況表示						
経済評論。						
配架場所： 図書館開架・展示	頻度： 月刊	製本： 要				
巻号	通号	注記	発行日	処理	日付	
33	12	486	84.10.15	製本発注	7.12	
33	13	487 C	84.11.1	製本発注	7.12	
34			84.11.1	支払済	12.10	
34	1	488	84.12.1	支払済	1.10	
34	2	489	85.1.1	支払済	2.6	
34	3	490	85.1.1	支払済	3.5	
34	4	491	85.3.1	支払済	4.1	
34	5	492	85.4.1	支払済	5.10	
34	6	493	85.5.1	支払済	6.13	
34	7	494	85.6.1	支払済	7.6	
34	8	495	85.7.1	受入	7.12	
次頁→前選 前頁→後選 前画面→前選 終了/再検索→終了						

図10 雑誌受入状況画面

この画面では、最新(更新を前日までの分にするか、1週間前までの分にするか未定)の受付状況を知ることができる。

5. 今後の展望

5.1 システム開発日程

本稿で概要を紹介した北大システムの全体像は、7月末現在のシステム設計実施部会における構想で8月には日本電気との技術的検討に入る。9月以降は、基本設計の細部のつめを行なう。各サブシステムごとに処理フローの作成、ファイル項目決定、画面設計、帳票設計、コード表の作成等が作業の内容となる。

11月から詳細設計に入る。プログラムは主として日本電気が担当して12月頃から作成がはじまるが、共同で開発する場合もある。

2月から3月にかけて一部のサブシステムは完成し、プログラムのテストに入る。

したがって来年度早々にも蔵書検索システムと雑誌情報管理システムの本格稼働を目指している。その後順次各サブシステムも完成し、来年の秋口までにはほぼ全システムが運転される予定となっている。

この開発日程は電算化システム導入が決定されてから1年間で北大システムの主要部分の本稼働を画するという驚異的な短期開発を志向するもので、さまざまな困難に直面していることも事実である。とりわけ文情センターと整合性をもつ部分では、文情センターと電算化先行館との間で接続テストが繰り返されているものの、いまだ本格接続とはいえないので、開発日程消化にかなり深刻な影響があると思われる。

また2期計画となっているハウスキーピング業務の開発も、北大システムの中では単独システムとして存在するのではなく、システム内で整合性のとれたものとして構築されなければならないので、並行的に設計していく必要がある。

5.2 学内「図書館環境」の整備と教育・研修・広報活動

オンラインシステムの導入はこれまでの利用環境、作業環境に大きな変化をもたらす。一方で、それがシステムとして効果を発揮するためには、従来の種々の規程類の改訂や組織のあり方にも改編を促すものである。とりわけ新しいシステムの登場は、使う側にも運用する側にも新しい知識の習得を必須の要件とする。

学内の「図書館環境」の整備としては、書誌情報の標準化・統一化を図るために「図書担当者連絡会議」あるいは「雑誌担当者連絡会議」を発足させる準備が進んでいる。また、検索した資料の利用を促進するため、資料の所在情報を従来以上に正確で詳細なものとする必要があるが、この点を検討する「所在情報管理担当者連絡会議」も近々発足する。

規程類では一例として「オンライン全学閲覧規則」が必要である。

教育・研修活動としては、8月30日に全学の図書館職員を対象にシステム説明会が開催される。また、今後は各業務担当ごとにプログラム作成がしばしば必要となるので、12月にプログラム講習会を予定している。業務にしろ利用にしろ端末の操作にはカナタイプが必須条件となるので明年1月以降カナタイプ講習会を行う。一方、図書管理システムで触れたように目録作成業務は文情センター仕様で行うこととなるので、文情センターで行われる目録研修に担当者全員の参加が必要となる。

6. おわりに

以上が北海道大学図書館オンラインシステムの概要であり、システム設計実施部会の4カ月間の検討内容である。大学図書館業務の電算化は至難である。それが証拠に我が国では、いまだ満足いく程度に稼働している図書館システムは極めて少数であるといっても過言ではない。

後発とは言え、そのようなシステム開発の困難さから、ひとりわれわれだけが自由であるという保証も少ない。ただ、われわれは、利用者の視点からシステムを考えることがシステム自体を非常にシンプルにすることを学んだ。そのことが北大システムを作り上げていく上で、何らかの影響をもたらすのではないと思われる。

ともかく、今やシステム構築は実験でも試行の段階でもない。使われる現場を想定した、真の実用的なものが求められるのである。素人の集団であるシステム実施部会ではあるが、今後とも本稼働を目指して最大の努力を惜しまぬ覚悟である。学内諸賢のご批判ご叱正を賜れば幸甚である。

(文責・システム設計実施部会 小西和信)

◆ 会 議

第120回 図書館委員会

<と き 昭和60年5月25日(土)>

<ところ 附属図書館会議室>

議 題

1. 昭和59年度決算について
2. 昭和60年度所要額要求書について
3. 昭和60年度図書資料(大型コレクション)について
4. 学内共同利用逐次刊行物叢書類等の取り扱いについて
5. そ の 他

第121回 図書館委員会

<と き 昭和60年6月24日(月)>

<ところ 附属図書館会議室>

議 題

1. 昭和60年度予算配当(案)について
2. そ の 他

第122回 図書館委員会

<と き 昭和60年7月23日(火)>

<ところ 附属図書館会議室>

議 題

1. 図書館電算機導入計画について
2. そ の 他

第83回 教養分館委員会

<と き 昭和60年7月4日(木)>

<ところ 教養分館会議室>

議 題

1. 昭和59年度図書費決算について
2. 昭和60年度図書費予算(案)について
3. そ の 他

図書担当掛長会議

<と き 昭和60年4月26日(金)>

<ところ 附属図書館会議室>

議 題

1. 自然系学術雑誌バックナンバー收藏のための調査について
2. システム実施部会(案)について
3. 本会議の定例化について
4. そ の 他

図書担当掛長会議

<と き 昭和60年5月17日(金)>

<ところ 附属図書館会議室>

議 題

1. 会計検査院実地検査について
2. そ の 他

図 書 担 当 掛 長 会 議

<と き 昭和60年6月27日(木)>

<ところ 附属図書館会議室>

議 題

1. 図書館資料個別化記号について
2. 受入業務の電算化について
3. そ の 他

第32回国立大学図書館協議会総会

本年度の国立大学図書館協議会総会は、東海地区の担当で、名古屋大学が当番館として、名古屋市中小企業振興会館を会場に、6月13、14の両日にわたって開催された。参加者等は、95大学、238名で、文部省からは、学術情報課長、学術調査官、大学図書館係長が列席した。

議事等は、次のとおりである。

○協 議 事 項

- ① 理事選出 ② 監事選出 ③ 昭和59年度決算 ④ 昭和59年度岸本博士記念基金収支決算報告 ⑤ 昭和60年度予算(案) ⑥ 国公私立大学図書館協力委員選出 ⑦ 国際図書館連盟(IFLA)東京大会への対応 ⑧ 調査研究班 その他

○研 究 集 会

テ ー マ 学術情報システム運用のビジョンについて

- ① 神戸大、北大
- ② 東工大、兵庫教育大、広大
- ③ 東大文献情報センター からそれぞれ発表

○分 科 会

第1分科会(運営・サービス)

- ① 文献情報センターの充実と各大学図書館の電算化の早期実現
- ② 大学図書館の公開
- ③ 文献情報センターの充実、文献情報ネットワークの拡大
- ④ 学術情報システムの早期実現に対応する各館の体制
- そ の 他

山田学術情報課長、秋月北方資料室主任、国立大学図書館協議会賞受賞

当館学術情報課長 山田常雄氏、同閲覧課参考調査掛北方資料室 秋月俊幸氏の両氏は、昭和60年度国立大学図書館協議会賞を受賞され、去る6月13日、名古屋で開催された第32回同会総会の会場において表彰状及び記念品が贈呈された。

この賞は、国立大学図書館協議会が、元東京大学附属図書館長故岸本英夫博士の、わが国の大学図書館に尽くされた功績を末永く伝えるため岸本英夫博士記念基金を設置し、その基金から国立大学図書館職員の図書館学に関する優れた研究業績及び図書館活動における優れた功績に対して毎年贈ることになっているもので、山田常雄氏は「イギリス分類研究グループ(CRG)における分類理論の展開」と題した研究論文、秋月俊幸氏は「開拓使外国人関係書簡目録」の編纂についてそれぞれ受賞されたものである。

なお、両氏の受賞を祝って、6月21日夜当館会議室において大野館長、松川事務部長をはじめ学内図書館関係者が多数集って盛大な祝賀会が開かれた。

第2分科会(予算・人事)

- ① 電算化のための要員の養成・研修
- ② 学術情報資源の確保充実
- ③ 人材の養成確保
- ④ 職員の研修

そ の 他

○全体会議

各分科会のとりまとめ

◆ 電算化ニュース

図書館業務用電子計算機機種選定委員会(第3回)

く と き 昭和60年6月4日(火)>

く ところ 北海道大学附属図書館会議室>

メーカー3社から提出された提案書の内容及び5月29・30日に行われた3社とのヒアリングの内容をもとに事務局で作成した比較表、ヒアリング概要等に基づき機種の検討を行った。

図書館業務用電子計算機機種選定委員会(第4回)

く と き 昭和60年6月8日(土)>

く ところ 北海道大学附属図書館会議室>

提案内容の確認が行われ、追加提案依頼の内容について討議した。

図書館業務用電子計算機機種選定委員会(第5回)

く と き 昭和60年6月20日(木)>

く ところ 北海道大学附属図書館会議室>

最終提案依頼に対するメーカーからの回答をもとに、提案内容の比較検討を行い第一順位のメーカーを内定した。

図書館業務用電子計算機機種選定委員会(第6回)

く と き 昭和60年7月12日(金)>

く ところ 持 回 り 会 議>

第1位のメーカーと図書館との間で交された最終確認事項が承認され、正式に採用機種が内定した。

電 算 化 準 備 記 録 (4)

昭和60年5月～60年7月

年 月 日	事 項	年 月 日	事 項
60.5.1	第3回システム開発準備部会および 第1回システム設計実施部会合同部会 (システム設計に当っての諸問題)	60.6.19	第6回システム設計実施部会
60.5.16	第2回システム設計実施部会	60.6.20	図書館業務用電子計算機機種選定委員 会(第5回)
60.5.22	第3回 //	60.6.26	第7回システム設計実施部会
60.5.29	メーカーヒアリング(日電, 日立)	60.6.27	全学図書担当掛長会議(資料個別化記 号, 受入業務)
60.5.30	// (富士通)	60.6.28	図書館電算化懇談会(第2回)
//	第4回システム設計実施部会	60.7.3	第8回システム設計実施部会
60.6.4	図書館業務用電子計算機機種選定委員 会(第3回)	60.7.11	第9回 //
60.6.5	第5回システム設計実施部会	60.7.12	図書館業務用電子計算機機種選定委員 会(第6回)
60.6.8	図書館業務用電子計算機機種選定委員 会(第4回)	60.7.17	第10回システム設計実施部会
//	図書館電算化懇談会	60.7.23	第122回図書館委員会(図書館電算機 導入計画)
60.6.17	電子計算機導入に関する図書館ユーザ ー懇談会	60.7.24	第11回システム設計実施部会
		60.7.31	第12回 //

◆ 受 贈 図 書

本学教官著作物

〔本 館〕

○法 学 部

- 実 方 謙 二 独占禁止法を学ぶ 有斐閣 1979
 // 改訂 独占禁止法入門 青林書院新社 1983
 // 寡占体制と独禁法 有斐閣 1983
 // 経済規制と競争政策 成文堂 1983

○言語文化部

- 中 野 美代子 西遊記の秘密 福武書店 1984

○スラブ研究センター

- 木 村 汎 逆説のソ連 人間の科学社 1985
 伊 東 孝 之 Nomenklatura in Polen; die Kontroverse um ein Hauptinstrument politischer
 Kontrolle der Gesellschaft. (Sonderveröffentlichung des Bundesinstituts für
 ostwissenschaftliche und internationale Studien) Köln, Bundesinstitut für
 ostwissenschaftliche und internationale Studien, 1983.

◇ 人事往来 ◇

○図書館委員会委員

山 村 悦 夫	(大学院環境科学研究科 教授)	60. 5. 28
古 矢 旬	(法 学 部 助 教 授)	60. 7. 1



北海道大学附属図書館報 「榆蔭」 (通巻 66 号)

1985 年 8 月 31 日 発行 発行人 松 川 衛

編集委員 遼 昭二(長)・久原秀志(図)・山口國雄(図)・高砂 慶(図)・藤島 隆(医)・岡田 潔(経)
字野洋子(理)

発 行 所 北海道大学附属図書館 札幌市北区北 8 条西 5 丁目 電話代表 716-2111 (2967)

印 刷 所 文 栄 堂 印 刷 所 札幌市中央区北 3 条東 7 丁目 電話代表 231-5560 ・ 5561